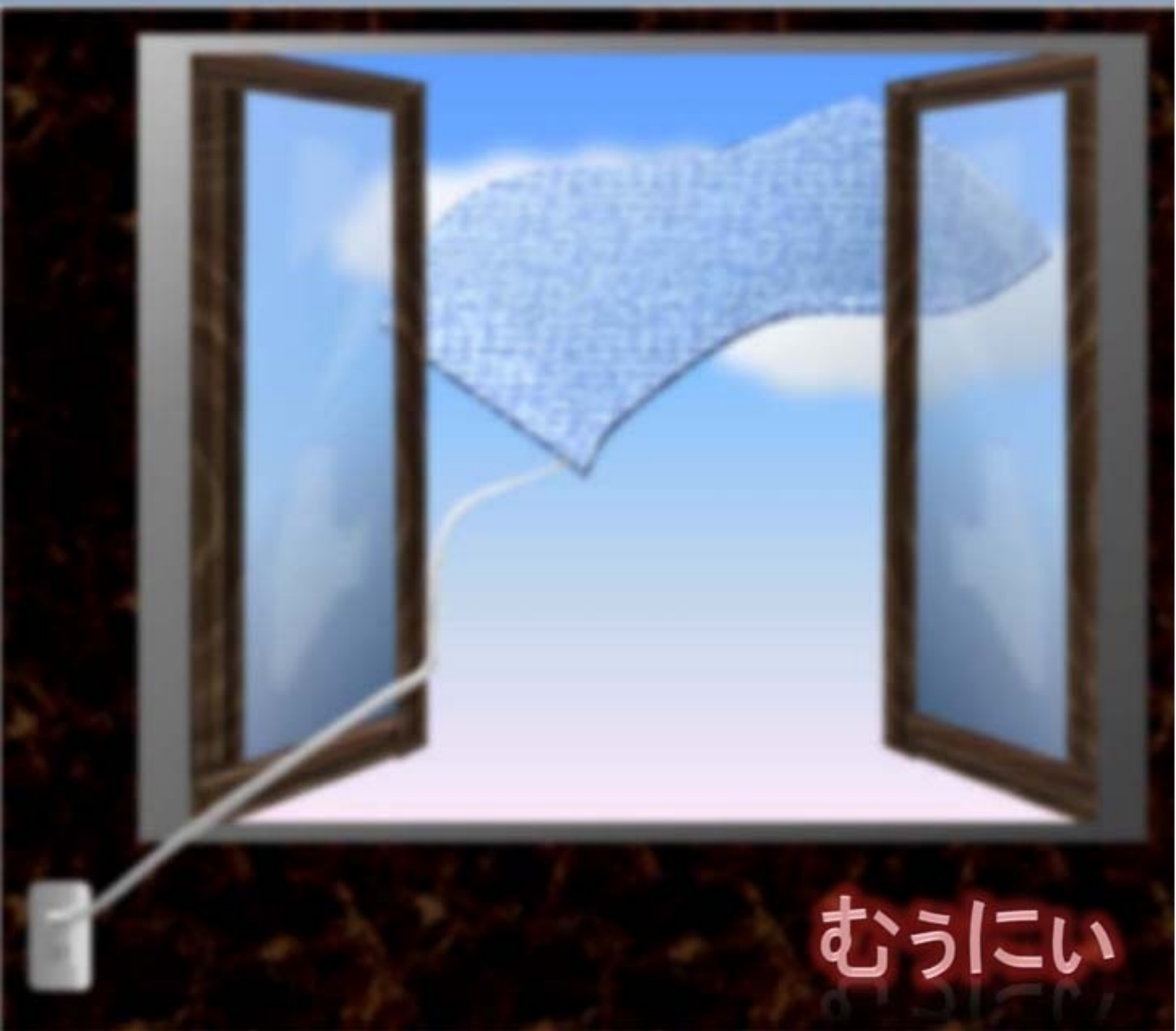
週刊 夢の窓 No.17



むうにい

海底動物園に行く

　腐れ縁の桑田孝夫とわたしは、清水港にある、エスパルスドリームプラザのタリーズでアイス・コーヒーを飲んでいた。
「動物園に行こうって言うからついてきたけど、ここって港じゃん。それとも、日本平まで行くの？」わたしは状況が、よく飲み込めていなかった。

「いいや、ここでいいんだ。ほら、波止場を見てみろよ。あれは何だと思う？」桑田は窓の外をあごで示す。
　ヨットがたくさん浮かんでいる。
「ヨットで行くつもり？」わたしは驚いた。
「ばかっ。もっと、ちゃんと見ろ」
　ヨットに混ざって、黄色い小さな潜水艦が潜望鏡を出したまま波間で揺れている。
「まさか、あれに乗って行くんじゃないよね？」
「その、まさかだ。さ、残りのアイス・コーヒーを飲んじまえよ」

　桑田は潜水艦をコンコン、とノックした。すぐにハッチが開き、セーラー服姿の男が顔を出す。
「はあい、毎度お馴染みの海底動物園行き潜水艦『ぶくぶく号』でございます」男はにこっと笑ってそう言った。
「２人乗ります」と桑田。
「頭をぶつけないよう、お気をつけてお降り下さあい」
　桑田がまず入り、続いてわたしも乗艦する。
　中は軽自動車程度のスペースで、どちらの席に座っても、窓の外を眺めることができた。
「思ったほど、狭くないんだね」わたしは桑田に話しかける。
「うん、そうだな。結構、快適だよな」桑田もうなずいた。

「それじゃあ、ぶくぶくっと潜らせていただきまあす」艦長はポンプのスイッチをポチッと押す。バラストタンクに水が流れ込み、潜水艦は徐々に沈んでいく。
　潜行しながら、少しずつ沖に向かって進む。窓の外が次第に暗くなっていく。
「でも、海の底にあるんだったら、動物園じゃなく、水族館なんじゃないかな」わたしが言うと、
「いや、それが違うらしいんだ。クジラとかサカナなんかじゃなく、キリンやゾウもいるって、パンフには書いてあったぞ」
「海にキリンやゾウ？　ほんとかなあ」
「着いてみればわかるさ」桑田は本気で信じているようだ。

「お客様、海底をごらん下さあい。あれが駿河海底動物園でございまあす」艦長が告げた。
　わたし達は急いで窓の外を覗き込む。普通の動物園のように、大小、様々な檻が並んでいるのが見えた。
　潜水艦は、檻のすぐ近くまで潜り、歩く速度で巡回していく。
「わっ、ほんとだ。キリンがいるよっ」わたしは思わず声を上げた。背の高い檻の中に、やたらと首の長い、網目模様をプリントした動物が、ジャイアント・ケルプをはんでいる。
　桑田がわたしの側の窓に顔を寄せてきた。「でも、ちょっと変な姿だな。あ、そうか。脚がみんなヒレになってるのか！」
　檻には「ウミキリン」と名札が掛かっている。

「おおっ、見ろ、むぅにぃ。ウミザルがいるぜっ」今度は桑田の窓から見える檻だった。
　ゴリラほどの大きさで、海の生き物にしてはやたらと毛深い。
「伊藤英明にちょっと似てない？　ほら、あのエラが張っているとこなんてさ」わたしは言った。
「ありゃあ、本物のエラだ。海ん中に住んでるんだからな」
「この動物園にいるのって、何でもかんでも頭に『ウミ』が付いてるね」
「まあな。何つったって、海底動物園だし」
「ウミブタもいると思う？」わたしは聞いた。
「それ、漢字で『イルカ』って読むんだろ。いねえんじゃないか、かぶっちゃってっから」

「この先は海底牧場になってまあす」艦長が案内を読み上げる。
「牧場だってさ」わたしは、窓にほっぺたをくっつけて、あちこちと探した。
「ということは、放し飼いにしてるんだな。ウミヒツジとか、そんなところかねえ」桑田は首を捻っている。
　その時、潜水艦の上空を大きな影が横切っていった。
「あっ、あれは」わたしはガラスに手をついて見上げる。
「いたのか？」
　白地に青い水玉の大きな動物だ。尻尾の代わりに、ピンクの花をくっつけている。
「うん、間違いない。ウミウシだよ」

バクテリア・モンスター

　真昼の町中に、突如としてバクテリア・モンスターが現れた。
「逃げろー、襲ってくるぞっ！」人々は着の身着のまま、逃げ惑う。バクテリア・モンスターは、まるで意志を持った大きな波のように、うねり、震え、鞭毛を振り回しながら、なだれ込んできた……。

　そもそものきっかけは、神社の前に捨てられていた小さな段ボール箱だった。
「バクテリアの子です。どうぞ、可愛がって下さい」とマジック・インキで書いてある。
「可哀想に」わたしは箱の前にしゃがみ込んだ。明るい灰色で、今川焼きをきゅっと引き伸ばしたような形をしている。まだ、手の平にすっぽりと収まるほど小さい。
　食べ物も摂っていないのだろう、鞭毛を弱々しく伸ばし、必死にすがってくる。

　わたしは放っておけず、段ボールごと抱えて部屋に持ち帰った。
「君は嫌気性のバクテリアじゃなさそうだね。大腸菌かな？　ヨーグルト、食べてくれるといいけど」
　冷蔵庫からカップ入りヨーグルトを持ってきて、バクテリアの前に置いてみる。鞭毛でクンクンと匂いを嗅いでいたが、すぐにおいしそうにすすり始めた。
「よかった。早く、元気になるんだぞ」わたしはほっとひと息つく。「そうだ、名前をつけなきゃね。えーと……。桿菌だから、『カンちゃん』なんてどう？」
　バクテリアは食べるのをちょっとだけやめ、嬉しそうに鞭毛を振るわせる。
「ふふ、気に入ってくれたんだね」
　こうして、わたしとバクテリアのカンちゃんとの生活が始まった。

　カンちゃんはすくすくと育っていった。
　初めのうちはヨーグルトしか食べなかったが、成長するにつれ、野菜の残り物、余ったおかず、何でも摂取するようになった。
　悪くなってしまった肉や魚など、ぺろりと平らげてくれるので、生ゴミを出さずに済むようになり、わたしとしても大助かりだ。
「それにしても、大きくなったなぁ」わたしは胸に込み上げるものを感じた。拾ってきたときは手の平に載るほどだったのに、今では抱き枕よりまだ大きい。
　体をそっとなでてやる。マシュマロのようにふんわりとした感触がした。長い鞭毛を、わたしの腕にクルクルッと巻きつけて懐いてくる。
　わたし達にとって、至福の時間だ。

　けれど、そんな幸せも長くは続かなかった。
　どこから漏れたのか、たちまち町内の知るところとなり、ある日、部屋のチャイムが鳴った

のだ。
「こんにちは、保健所の者ですが」
「はい、何でしょう？」わたしはそらっとぼける。
「隠してもダメです。こちらでバクテリアを飼っているとの情報がありましてね」保健所の職員が感情の欠けらもない口調で詰め寄った。
「カンちゃんは、決して悪いバクテリアなんかじゃありません。どうか、見逃して下さい」わたしは懇願する。もちろん、通用するような相手ではなかった。
「そうはいきません。これも規則ですのでね」
　カンちゃんは、シュラフのような袋に密封され、そのまま連れていかれた。わたしのカンちゃん。

　搬送先は教えてもらえなかった。聞くところによれば、アメリカのＣＤＣかユーサムリッドで、レベル３に隔離されているという。
　そんな施設に入れられてしまっては、もう二度とカンちゃんに会うこともできまい。
　あきらめるより仕方がなかった。

　ところが、カンちゃんは自らの運命を妥協するつもりなぞ、さらさらなかった。
　どうやったのかはわからないけれど、エネルギーを吸うことで体を膨れ上がらせ、ついには施設を脱出することに成功したのだ。
　火器も化学薬品もまるで効かず、文字通りバクテリア・モンスターと化してしまった。
　そのまま太平洋を渡り、ここ日本へと帰ってきた。
　そう、このわたしを恋い焦がれて！

　わたしは、団地の屋上まで上り、声が枯れる勢いで叫び続けていた。
「カンちゃーん、お願いだから、大人しくしてったらぁーっ！」
　今や、ビルを飲み込むほどの巨体となったカンちゃんに、わたしの小さな声など届くはずもない。それでも、呼び続けずにはいられなかった。
　上空を、数えきれないほどの軍事ヘリコプターが飛び回っている。自衛隊機に混ざって、アメリカ空軍のものも見えた。
　町内放送のスピーカーが、あっちでもこっちでもがなり立てているので、初め、何を言っているのか聞き取れなかったが、どうやら「最終手段」を講じるらしい。

　アメリカのヘリコプターが何かを発射した。ミサイルに見えたがそうではなく、銀色をしたカプセルだった。
　カプセルはカンちゃんの体表で炸裂し、中からロボットのような物が数体飛び出す。
　12面体の頭に複数の脚を持ち、がっちりとカンちゃんを捕らえて離さない。まるで、月面に到

着した探査機のようだ。
「あれはまさか……」わたしは絶句した。

　バクテリアには、それを食うウィルスがいると聞いたことがある。「バクテリア・ファージ」と呼ばれている。
　彼らはバクテリアに取りついて、体を内部から分解してしまうのだ。
「待って、やめてーっ！」声を張り上げながらも、もはやそれしか方法はないのだ、と自分でもわかっていた。
　ファージ達は、カンちゃんの体を蝕み、至るところに穴を開けていった。
　カンちゃんは鞭毛をしならせ、ファージを振り払おうとする。それも、所詮は空しい行為に過ぎなかった。
　体の大半が崩れ落ち、かろうじて一部が残っているばかりである。

　その最後も溶けてなくなろうかと思えた刹那、鞭毛が力なくわたしを指し示した。懐かしい友人に再会した、そんな波動をわたしは確かに受け止めた。
「カンちゃん……」わたしは思わず、膝をついていた。
　鞭毛はタバコの灰のように吹き流され、宿主を失ったファージも次々と砕けていった。

道に迷ってアマゾン

　目と鼻の先のコンビニへ買い物に行こうとしたら、どういうわけだか道を間違えてしまった。
「あれ、ここはどこ？」わたしは呆然と立ち尽くす。遠くに見えるはずの都庁が見当たらず、代わりにうっそうとしたジャングルが広がっていた。
　今は夏で、暑くて蒸し蒸しとしているのは当たり前のことだけれど、いつにも増してむっとする。
　よく見れば、木も草も「亜熱帯植物原色図鑑」でしか見たことのないようなものばかり。遠く頭上からは、鳥か獣かもわからない、奇妙な鳴き声が聞こえてくる。

「どこに来ちゃったんだろうな。下落合を、こう歩いてきたんだから……まさか、新大久保に来ちゃったのかなっ」藪をかき分けながら、わたしは歩き回った。
　コパイバ・マリマリの木の幹に、「ようこそ！　アマゾンへ」という看板を見つける。
「ああ、アマゾンか。まいったなあ」わたしは気落ちし、自分の方向音痴を呪った。「とりあえず、炊飯器だけでも取りに戻らなくちゃ」
　わたしは大急ぎで家に帰ると、炊飯器に米を３合量って詰める。水を入れると重くなるので、アマゾン川で間に合わせようと考えた。
「おかずは現地調達ということで」わたしは炊飯器を抱えて、元いたアマゾンへ取って返す。

　川縁で米を研ぎ、ぽかんと口を開けて待っているデンキウナギにコンセントを差し込む。
「ふう、これでよし。ひとめぼれをアマゾンの水で炊くっていうのも、案外、贅沢な楽しみかもしれないなぁ」
　ご飯が炊けるのを待っている間、わたしは急ごしらえの釣り糸を川面で操る。
　何が釣れるかわからないが、ピラニアだったらラッキーだ、そう期待する。脂の載ったピラニアは、煮ても良し、焼いても良し。刺身で食べても最高なのだ。

　しばらく岸に座るが、なかなか喰いついてこない。
「おかずなしのご飯なんて、コーヒーを入れないクリームのように寂しいものになりそう」わたしは憂うつになった。
　こんな時、通販とかがあれば便利なのだけれど。

　待てよ、とわたしは閃いた。スマホをポケットから出して、いつもの通販サイトにアクセスしてみる。
「あー、よかった！　ちゃんとつながるっ」
　さっそく、注文をしようと、メニューを開いた。
　何にしようかな。レトルト・カレー（甘口）と、それにドクター・ペッパーを頼もうか。
「いや、待てよ。せっかくアマゾンに来てるんだから、ここでしか食べられないものにしよう」

　リストには、オポッサムの蒸し焼き、ナマケモノの味噌和え、など、日本ではまずお目に掛かれないものばかり並んでいる。
　さんざん悩んで、カイマンの姿焼きに決めた。１人前が2,000円と、ちょっと高い気もしたが、こんな時でもなければ食べる機会はない、そう割り切ってみる。

　炊飯器の炊き上がりお知らせアラームに合わせたように、川上からは防水段ボールが、どんぶらこ、どんぶらこと流れてきた。
　たぐり寄せて岸に上げてみると、さっき頼んだ「カイマンの姿焼き」と、その明細書が入っている。
「うーん、焼きたてのワニのいい匂いっ。どこから食べようか。頭からかな、それとも尻尾からかなぁ」
　アマゾンの森に日が暮れていく。明日は家に帰れるといいな。

１冊分の隙間

　ゴロンと寝そべった時、それに気がついた。
　上から２段目、ミステリー文庫ばかり、作者もシリーズもバラバラで詰め込まれている棚に、ちょうど１冊分の隙間が空いているのだ。
「なんで、あそこだけ……」わたしは首を傾げる。
　考えもなしに本を買ってしまうものだから、本棚はとっくにいっぱいだ。置けない分は押し入れに積み上げあるほどなのだ。本１冊分のスペースなど、残しておくはずがなかった。

　第一、昨日見た時は、確かにぎっちりと並べられていた。ということは、その後、自分で本を取り出し、どこかに置き忘れてしまったということになる。
　ただ、その本がなんだったのか、どうしても思い出せない。
「何だったかなぁ。あそこにあったのなら、ミステリー小説なんだけど」
　テーブルやベッドの上も探してみたが、どこにも本は見当たらなかった。今日はまだ外出していないから、喫茶店に忘れてきた、などという理由も浮かばない。
　自分で自分の頭をコツン、コツンと小突きながら、もやもやと気持ちで隙間をじぃっと見つめる。

　一瞬、隙間で何かが動くのが見えた。
「気のせい……だよね？」立ち上がって、隙間を覗き込んでみる。
　文庫本の幅だけ暗がりができ、奥へ行くほど闇は濃くなっていた。
　それはまるで、ビルとビルとの間にできた狭いスペースのようだった。ネコがやっと通り抜けられるような場所で、誰ものぞき込もうとはしない陰った世界。

　気味が悪くなって、両隣の本を数冊引き抜いてみる。窓からの光は、何の変哲もない化粧合板を照らすだけだった。
「ほらね、やっぱり何でもなかった」わたしは安堵し、手に持っていた本を戻す。
　再び、例の隙間がそこに生ずる。隙間の向こうから、漆黒が物質となって溢れてくるような気がした。

　少し遅い朝食を摂ろうと、キッチンの戸からシリアル・フードを取りに行く。
「あれ？」戸が少し開いていて、シリアルの箱が隙間からのぞいていた。奥に何かがあって、閉まりきらないようだ。
　中を確かめてみると、本が１冊出てきた。アガサ・クリスティの「カーテン」だった。
「こんなところに――。そうだ、本棚のあの場所にあったのは、確かにこれだっけ。今、やっと思い出した」
　わたしは「カーテン」を手に、部屋へ向かう。

本棚を見たとたん、わたしはギョッとして立ちすくんだ。
赤い三角帽子をかぶった小人が、隙間から顔をのぞかせていたのである。
どす黒くてコブだらけの、ひどく醜い奴だった。わたしに気がつくと、ニヤッと感じの悪い笑みを浮かべ、暗がりの中へ走り去った。
わたしはガクガクと膝を震わせ、ゴクンと生唾を飲み込んだ。とても恐ろしかったけれど、すべきことは１つと覚悟を決め、「カーテン」をその隙間に押し込む。

どこか別の棚で、カタカタと音が聞こえた気がした。何かが、反対側から本を押し出そうとする、そんな音が。
ああ、どうか気のせいでありますように。

高架橋の向こうを目指して

　高架橋のすぐ下の遊歩道を、わたしはずっと歩いている。
　橋桁と橋桁の間はコンクリートでふさがれ、反対側へ渡れないようになっていた。
　わたしは、どうにかして向こう側へ行きたかった。どんな町並みが広がっているのだろう。どういった人たちが暮らしているのだろう。その全てを知りたいと願った。

　高架橋に貼り付くようにして、赤い屋根の保育園が建っている。どうも見覚えがあると思ったら、子供の頃に通っていた園だった。
　通用口から職員の１人が現れる。黒縁眼鏡を掛けた、保母さんだ。
「あら、むぅにぃちゃん」わたしに気づいて、ニコッと笑いかける。
「前川先生、お久しぶりです」わたしも軽く頭を下げた。「この高架橋は、いったいどこまで続くんでしょうか？」
「あなた、まだ向こう側へ行くことをあきらめてなかったの？　昔っから強情だったわよねぇ」前川先生はため息をつく。
「だって、どうしても行ってみたいんです。もしかしたら、あっちの方が面白いことがいっぱい、あるかもしれないじゃないですか」
「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ごめんなさい、わたしにはわからないわ」
「そうですか。もっと先へ行ってみます。では、失礼します」
　わたしは遊歩道に戻った。

　途中、ベンチに掛けて休んでいる男に出会う。
「あのう、前にどこかでお目に掛かりませんでしたっけ？」わたしが尋ねると、相手はギクッとして目をそらす。「どうかなさいました？」
　観念したように、おそるおそる顔をこちらへ向けて言った。
「あっしは、あんたがまだ10かそこいらの時に、あんたんとこのうちへ盗みにへえった事があるんでさ。あんたも、あんたの親御さんもすやすや寝てたから、知るわけがありませんがね」
　わたしは男の目をまじまじと見つめ返す。確かに、泥棒に入られたことは覚えている。あれは、小学４年の夏だった。その時の泥棒がこの男なのか。
「もう、過ぎたことです。盗んだ物と引き替えに、あなただって、心の痛みをそこに置いてきたじゃないですか。それでおあいこということにしませんか？」
　元泥棒は、袖で鼻をぐしっと拭った。
「ありがてえお話です。あっしなんか、引き倒されても、蹴られても文句は言えねえってのに……」
「先を急ぎますので、これで」
　わたしは歩きだした。

　鉛色のコンクリートは、いっかな途切れることがない。せめて、階段でもあって、乗り越えて行ければいいのだけれど。
　そう言えば、この上を走っているのは新幹線だろうか、それとも高速道路なのだろうか。
　遙か頭上に耳を傾けてみるものの、　物音１つ聞こえてはこない。

　後ろから、自転車が走ってきた。振り返ると、郵便配達員がわたしのそばまで来て停まる。
「むぅにぃ様ですね？」と郵便配達員。
「はい、そうですが」
「お届け物です」そう言って、封筒を差し出す。
「ご苦労様です」受け取った封筒を、その場で開けてみた。手紙が１通、入っている。広げると、ピンク色のアサガオの押し花がはらりと落ちた。
　アサガオを拾い、そばのキノコ型のイスに座って、手紙を読む。

　〔君がこれを読んでいるということは、まだ「向こう側」へはたどり着いていない、ということだよね？　焦ることはないさ。信じるものがあるんだったら、そのまま行けばいい。そういうもんなんだよ、人生って〕

　差出人の名前を見て、思わず懐かしさが込み上げてきた。中学２年の春に転校してきて、その年の夏休み中に引っ越していった友人だった。
　ほんの短い間だったが、たくさんのことを話し、数えきれないほどの思い出を作った。
　花が開いたら押し花を作ろうね、と約束したアサガオのこと、まだ覚えていてくれたんだなぁ。

　実は、向こう側へ行くことを半ば、あきらめかけていた。この高架橋は、永遠に続いているのではないか、そう思えてきたからだった。
　けれど、手紙を読んで、また元気を取り戻すことができた。世界がどんなに広くとも、歩ける限りは進んでやろう。

　わたしは立ち上がり、ポケットに手紙を押し込んだ。

　もらわれてきた時は、両手にすっぽりと収まってしまう赤ちゃんネコだった。
「名前、何にする？」わたしが聞くと、
「そうねぇ、チャトラだからチャコってどうかしらね」と母。
「おいおい、こいつは男の子だぞ。ほらっ」父は仔ネコを裏っ返しにして母に見せる。
「それじゃあ……」
　その後、１時間近く話し合って、やっと名前が決まった。わが家に、新しく家族が加わった。

　せっかく付けられた名前だっが、使われたのはその１回きりで、以来、「チャチャ」としか呼ばれることはなかった。
　大人になっても甘ったれな上、たいそうやんちゃだった。疲れを知らないのか、いつまでも遊び足らず、しかも、本気でかかってくるので、わたし達に生傷が絶える暇もない。
　それもこれも、躾らしい躾をせず、ただただ甘やかしてきたからだった。

　当初、ミルクの進まないチャチャを心配し、母は近所の動物病院に連れていった。
「この子は体が弱いから長生きはできないでしょう。せめて、おいしいものを好きなだけ食べさせ、たくさんかわいがってあげてください」獣医師は悲しそうに宣告した。
　覚悟を決めた母は、最期のその時まで、幸せだけを与え続けようと誓ったのである。
　家族であるわたし達にもその義務は課せられた。ご飯が欲しいと言えばすぐに食べさせ、ふすまやカーペットで爪を研ごうが、誰１人として叱ったりはしない。
　チャチャがわがままになったのも、当たり前の事だった。

　獣医の診立てとはほど遠く、チャチャはどんどん大きく、ますますパワフルになっていった。
　大変な慌て者で、毎日、なにかしら失敗をしでかしては、みんなをあきれさせ、時にははらはらとさせる。
　沸かしすぎた風呂を冷まそうと、ふたを半分だけ開けたままにしておけば、好奇心いっぱいにやって来ては、勢い余って飛び込んでしまう。
　調子に乗ってタンスを上ったはいいが、壁の間の隙間に転げ落ちて助けを求めて鳴く。
　立ち歩きのできるようになった幼児なみに、目が離せないのだった。

　普通、ネコというものは虫が好きなものだけれど、チャチャは彼らが大っ嫌いだ。
　夕食の支度が済んで、家族全員がテーブルについた時、先週から居候をしていた大きなゴキブリが、ひょっこり姿を見せた。
「あ、ゴキブリっ！」わたしは思わず叫び、脊椎反射のように、ティッシュの箱を引っ掴んで振り下ろす。見事な空振りだった。
「ほらほらっ、下に行ったよっ！」母も新聞紙を丸めて構える。

　ゴキブリは何を思ったか、わざわざチャチャの鼻先へと逃げていった。
「チャチャ、捕まえちゃえっ！」とわたし。
　ところが、「フギャッ」と鳴いて飛びすさり、のぞき込むわたしの頭から背中を踏み台すると、あっという間にテーブルに駆け上がった。
　盛りつけられた料理も食器も、すっかりめちゃくちゃだ。
　その晩は、近所のとんかつ屋で外食するはめになったっけ。

　そんな手の掛かるチャチャと３年ばかり過ごし、わたしは実家を出た。
　独り暮らしを初めてみると、あまりに平和で、しばらくの間は極楽にでも来てしまったような思いがしたものだ。
　生活に慣れてくると、あの当時のことが妙に懐かしく蘇ってくる。
　朝から晩まで、チャチャのドタバタと走り回る音や、突発的にやらかす騒ぎも、そう悪くはなかったぞ、と思い出されてくるのである。

　久しぶりに実家へ顔を出してみた。
　「あれっ、チャチャは？」わたしは言った。いつもなら、玄関をくぐるが早いか、転がるように飛び出してくるのに。
「ああ、連絡するかどうか迷ったんだけどーー」母にしては歯切れが悪い。
「死んじゃったの？」
「うん、去年の末にね。直前まで、さんざっぱら遊び回っていたのに、急に静かになってさ。変だと思って見に行ったら、いつも自分が寝ているマットの上で大の字になってたの。寝てるんだ、とばかり思ってたんだけど……」
「そうなんだ、チャチャは死んじゃったのかぁ」不思議と悲しくはなかった。どうやら、母も同様らしい。
「まるで、電池でも切れたみたいにパッタリと逝っちゃったからねえ」
「チャチャらしいなぁ。ほんと、チャチャらしいよね」わたしはしみじみとそう思った。

「獣医さんは半年と持たないだろう、なんて言ってたけど、10年だものねぇ。もう、十分だったろうと思うよ」母は、手の甲をわたしに差し出し、
「ここんとこの傷、チャチャに引っ掻かれたやつだよ」
　わたしも自分の手を見せる。
「これなんか、思いっきり噛まれた跡。加減てものを知らないんだからさっ」
　お互いの傷を数え合いながら、ふと考えた。この傷、ずっと残るのかなあ。
（たぶん、残るんだろうな。消えないで欲しいよ、いつまでも、いつまでも！）

　茶だんすにフォトフレームが立てかけられていた。元気いっぱいだった頃のチャチャが、じっとわたしを見ている。

命名されて以来、ほとんど使われたことのない名前を、わたしは10年ぶりに口にした。
「さようならだね、茶々丸っ……」

１日市長を務める

　どっしりとした革製のイスは、たいそう座り心地がよかった。それなのに、どうも落ち着かない。
　高さを変えたり、お尻の位置をずらしてみたりと、かれこれ30分も繰り返している。
　わたしは市長に任命されたのだ。といっても、本日限りだけれど。
　肩には、「１日市長・むぅにぃ」と書かれた紅白のたすきを掛けている。

　机の上の電話が鳴った。１階受け付けからの内線だ。
　わたしは一息置いて、受話器を取った。
「はい、１日市長」
「むぅにぃ、じゃなくて、あの、１日市長。あなたにお会いになりたいという方が、こちらにいらしてますが、どうしましょう？」
「お通しして下さい」わたしは言った。
「本当によろしいんですか？」相手が念を押してきた。
「ええ、構いません。わたしにご用なんでしょう？」
「わかりました。おっしゃる通りにいたします。それでは、窓の方へご案内いたしますので……」そう言うと、電話は切れた。

　はてな、窓から案内するって、どういうことだろう。お客さんなら、ドアから入ってもらえばいいのに。
　第一、ここは３階だ。羽でも生えていないかぎり、それは無理というものである。
　わたしは首を傾げながら、窓の外を振り返った。
「ええっ？！」思わず、大きな声を上げてしまう。確かに窓から顔をのぞかせる者があった。背中には羽があったが、飛んで来たわけではない。ただただ、図体が大きいのだ。
「今日は、１日市長さん。わたし、穴蔵山からこちらに越してきた、鈴木六太郎と申します」
「越してきたって、どこにです？」わたしはガラス窓越しに聞いた。「だって、あなた、どこからどう見たってドラゴンじゃありませんか。それにその全身を覆う赤いウロコ、焼け焦げた鼻先、お見受けしたところ、火吐き種でしょ？」

　ドラゴンは前足で頭の後ろをぼりぼりと掻いた。
「ええ、おっしゃる通り、少しばかり火を吐いたりします。ですが、吐くのは職場だけです。わたしは住み込みで働くことになったんです。グラウンドを間借りしましてね、そこで寝泊まりしています」
「はあ、そうですか。で、その職場というのは？」
「町外れのゴミ焼却場です」ドラゴンは答えた。

「ああ、なるほど。昨今、燃料代もばかになりませんからね。あなたのような方が働きに来てくれて、市としても大助かりです。それで、今日はどういったご用件でしょうか？」安全なドラゴンだとわかり、わたしは窓を開けた。硫黄の匂いがぷんっと部屋に流れ込んでくる。

「長期で働くことになりそうなので、こちらで市民登録をしておこうかと。ほら、市営のスーパーや交通機関が割引になるし、自治体に参加して地域貢献もできるじゃありませんか」
「一応、うかがいますが、国籍は日本ですよね？」
「ええ、もちろんっ！」ドラゴンは胸を張った。
「そういうことでしたら、あなたを市民として認めることにします」
「ああ、ありがとうございます、１日市長っ！」
「ただし、職場を除き、町中では一切、火を吐かないこと。この条件に署名していただきます」わたしは言った。
「はいはい、誓います。署名もいたします」

　わたしは引き出しから書類を出して渡す。ドラゴンは、窓から身をねじ込んで、必要事項を記入していった。
「じゃあ、この書類を持って、１階の１番窓口へどうぞ」
「えーと、あのう……」書類を手にしたまま、ドラゴンは困ったように立つ。
「なんでしょう？」
「わたしの体では玄関が狭すぎて、入れそうもないんですが」
「あ、そうかっ」うーん、と悩んで、「仕方がない。来週、またいらして下さい。それまでに玄関を広くしておきますから」
「そうしていただけると、助かります」ドラゴンはペコリとおじぎをして、帰っていった。

　時計を見ると、そろそろ夕方の５時になる。わたしの務めも終わりだ。
　メモ用紙にボールペンで走り書きをする。

　〔来週までに、玄関を広くするよう、工事して下さい。ドラゴンの鈴木六太郎さんが、市民登録の件で窓口を回ります。　１日市長・むぅにぃ〕

週刊　夢の窓　No.17

http://p.booklog.jp/book/88789

著者：mueny
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mueny/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88789

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88789

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ